
裏切りの恋『改稿版』

彼方 ヒロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

裏切りの恋『改稿版』

【Nコード】

N2351R

【作者名】

彼方 ヒロ

【あらすじ】

私と彼の、甘いクリスマス……。他小説サイト、ブログ、HPより転載

私は息を切らせながら、大通りを必死に走っていた。額には点々と丸い汗が浮かんでいる。

こんなに鼓動が激しいのは、きっと必死に走っているせいだけじゃない。

私は何度もフラッシュバックしてくるその光景を、必死に頭の奥へと押し込めようとする。

（忘れよう。とにかく……忘れよう）

私は一度立ち止まり、胸に手を置き、大きく深呼吸をしてみる。一回。……さらにもう一回。

その間、私は絶えず周囲に彼の姿がないか確認していた。

大通りの左右に林立するクリスマスツリーには、ネオンが散りばめられ、ケーキ屋の店頭でクリスマスソングがゆったりと流れていた。

人々はその楽しい雰囲気にも身を任せ、一様に笑顔を浮かべている。

私は自分に言い聞かせる。

（今だけは、すべてを忘れて楽しむんだ）

瞼を閉じ、そしてもう一度開いた時には、私の心はすっかり落ちていていた。

私はゆっくりと歩き出す。

そして広場に来ると、大きなクリスマスツリーがすぐに目に入った。

私はその前に立つ。

ここが、彼との待ち合わせ場所だった。

その時、往来の中に、薄茶色の髪が見えた。

私ははっと顔を上げ、その影を目で追いかける。

そうして彼の顔が見えた途端、ギリ、と胸がひび割れるのを感じた。

震えが走った。

——どうして。なんで。

その疑問が胸に反響する。

「メリークリスマス、望」

彼が笑い、そつとつぶやく。

その言葉を聞いた途端、感情を抑えられなくなり、「翔君！」と彼に駆け寄り、抱きついた。

彼は驚いた顔をして、しかしやがて微笑み、優しく抱き返してくる。

「どうしたの、望」

そつと背中をなでる彼。

「あのね、私ね……」

何もかもを話してしまいたい衝動に駆られる。だけど、彼の笑顔を前に、どうしても言えなかった。

代わりに、私はそれを確かめる——彼のポケットにそつと手を入れた。

その途端、

「あ……」

「どうしたの？」

翔君が私の顔をのぞきこんでくる。

その瞬間、私はすぐにバツと彼から離れた。

「一昨日会ったばかりなのに、もう寂しくなったのか？　大丈夫、

僕はここにいるよ」

そう言っ、彼はまた近づいてきてそつと私の手を握り、歩き出す。

私の心の動揺は、彼の手の温かみによって、徐々に収まっていく。私は自然と強く手を握り返した。

（今だけは……今だけは一緒にいられる）

その時、大通りを数台のパトカーが通り過ぎていった。それを目にした途端、私の心臓がどくと鳴る。

「どうしたの？」

目を見開いてパトカーを見つめる私に、彼が困惑げにつぶやく。

「なんでも……ない」

私は首を振って、震えながら俯く。

「それより、望はこれからどこに行きたい？」

私は彼の顔をじっと見据えた。

「……大岩公園」

その瞬間、彼の顔が強張った。そして、食い入るように私の顔を見つめてくる。

「駄目？」

私が無機質な声で言うと、彼は引きつった笑みで、「嫌だ。他のところにしようよ」と言う。

「どうしてもそこへ行きたいの」

私が強い口調でそう言うと、彼の眉がひそめられた。

「僕は行きたくないから」

「それでも行くの。絶対に」

すると、彼は唇を引き結び、鋭い視線を私に向けた。けれど、すぐに「わかったよ」と苦笑して歩き出した。

私達は住宅街を辿り、程なくして大岩公園に着いた。

木々にイルミネーションが施されていて、多くの見物客が訪れていた。

彼は強張った顔のまま、絶えず通行人の顔をちらちら見ている。

そんな中、私はそつと優しい口調でつぶやいた。

「ごめんね、無理を言っちゃって。でも、どうしても来てみたかったから」

「いや、いいんだ」

彼はそう言っただけで、私の顔を見ようとしなかった。

「実はまだプレゼント買ってないんだ、私。翔君は何か欲しい物ある？」

「僕は、」

彼は一瞬口籠り、そして、

「僕はもう欲しい物は手に入れた。最近、やっとやりたいことが見つかったんだ。それだけあれば僕は十分だよ。それをやってる時だけは、楽しい気持ちでいられるんだ。ようやく本当の自分を見つけた気がして」

そう言った後、ふと彼は相好を崩して笑う。

「もちろん、望と一緒にいる時が一番楽しいけど」

「ありがとう、翔君」

私達は笑い合って、そのままベンチに座った。

水筒を取り出して、暖かいアップルティーをコップに入れて翔君へと差し出す。

「ありがとう、望」

翔君は笑って、一口飲む。

私も内蓋にアップルティーを注いで、それに口を付ける。

彼と過ごす、このゆったりとした時間が本当にかけがいのないものに思えてくる。

しばらくそうやって心地良い一時を過ごしていると――。

突然、カラン、と地面から音が鳴った。

見ると、彼の持っていたコップが転がり、中身が地面にぶちまけられていた。

「翔、君？」

振り返ると、彼は小刻みに震えながら、目をぎよろぎよろと機敏に動かして絶えず周囲を見つめていた。

そして、彼は何かをつぶやいた。

「どうしたの……翔君？」

私は震える声を出し、彼の腕を握る。

すると、彼がつぶやいた。

「……りたい」

「……え？」

その途端、彼が勢い良くベンチから立ち上がった。

そして、血走った目を私に向けてくる。

「トイレに行ってくる」

それだけを言い、彼は人込みの中へと駆け入っていった。
やがて彼の背中が消えると、私の頬を一筋の雫が滑り落ちる。

（……もう、駄目なのかな）

私はそっとポケットに入っていたそれを取り出し、その表面を撫でる。

そこには、まだ彼の体温が残っていた。

それを地面に放った。

キン、と小さな音を立てて転がる。

（すべてを……終わらせなくちゃ）

私は立ち上がり、公衆電話に歩み寄って、受話器を取った。
その番号にかける。

（彼が好きだから。だから——）

コール音は鳴らず、すぐに電話が繋がり、そして私は——。

私がベンチに座って黙っていると、彼が戻ってきた。

彼は何故かひどく取り乱した様子で、ポケットをまさぐりながら
「どうしよう……」とつぶやいている。

「どうしたの？」

私がそう言うと、彼はその蒼白な顔を私に向け、「いや、なんで
もないんだ」と言葉を濁す。

けれど、私の足元を見つめた瞬間、彼の顔が安堵で緩んだ。

彼は身を屈めて何かを拾い、そっとポケットへと入れた。そして、
「もう他の場所へ行こうよ」

彼は笑顔でそう言って、私の腕をつかむと、そのまま引っぱ張って
いく。

私達は公園を出て、元の道を引き返し、またあのクリスマスツリ
ーの並ぶ大通りへ戻ってきた。

彼が「これからどこに行く？」とつぶやきかけたその時——。

私は彼の腕を振り切り、駆け始めた。

「望！」

彼が驚愕に目を見開いて叫ぶ。

私は振り返らず、そのまま人込みに紛れ込んだ。

そして、何度も後ろへ振り返り、彼の姿がないことを確認すると、そつと近くにあった小さなクリスマスツリーの前へ屈みこみ、その小箱を吊るした。

視界は涙で歪んでいたけれど、私は再び駆け出す。

そして、かるうじてツリーが見える距離まで来ると、彼へメールを打った。

『交差点横の小さなツリーの前』

すると、程なくして翔君が現れ、彼はツリーの前まで歩み寄った。

『そのツリーに、小さな箱がかかっている』

彼は携帯を食い入るように見つめて、そしてそつと屈みこんでその小箱をつかんだ。

『これ……僕へのプレゼント？』

『そうだよ。翔君の為の、心からのプレゼント』

『なんだ、ドッキリだったのか。……ありがとう。開けてみるよ』

彼の顔が微笑むのがわかった。

彼はそつとりボンを解き、箱を開き――。

そして、顔を凍りつかせた。

彼はそつと箱からその一枚の写真を取り出す。

そこに写っているのは――。

今日、私達は午後六時にツリーの前で待ち合わせをすることになっていた。

けれど、私は彼とのデートを楽しみにするあまりに、三十分も前に目的地に到着してしまった。

彼の家はすぐ近くだったから、私は彼を迎えにいくつもり、住宅街に入った。

この近辺は、最近通り魔が出ていることで話題になっていて、でも私は正直浮かれていてそれどころじゃなかった。

そんな時、私は道を歩く彼の姿を見つけたのだ。

（翔君！）

私は思わず声をかけようとしたけれど、ふとバックから小さい頃母にもらった宝物のポラロイドカメラを取り出し、悪戯心で背後から彼の姿を撮ろうとした。

足音をひそめて近づき、そっとシャッターチャンスを探っていると、彼が前を歩く女性をまっすぐ見つめていることに気付いた。

訝しく思いながらも、私はそっとシャッターボタンを押しかける。その時だった。

ポケットに差し込まれていた彼の手が翻り、銀色の軌跡が空中に閃いた。

その瞬間、彼の前を歩く女性が地面に崩れ落ちた。

同時に、カメラから、一つの写真が出てくる。

彼がナイフを振りかざし、女性の横顔を切りつけるその瞬間が写っていた。

私は息を呑み、気付けば、彼に背を向けて駆け出していた。

（……どうして。なんで、彼が）

信じたくなかった。でも、この手にはその瞬間を写した証拠が残っている。

（嫌だよ。こんなの、嫌だよ）

私は涙を流しながら、「翔君」と繰り返し、住宅街の道を走り続けた。

今までの幸せな日々が、すべて黒色に塗りたてられていく。

写真を驚愕の表情で見つめ続ける彼の背後から、そっと歩み寄る数人の影があった。

彼は遠くからパトカーのサイレンが近づいてくることにさえも、まだ気付いていない。

（私がやったことは、正しかったのかな）

出会い頭、彼に抱きついた時、そつと彼の上着のポケットをまさぐって、ナイフを探り当てた時の絶望感。

最近通り魔事件が起きたスポットである大岩公園に行こうと誘った時の、彼の困惑した表情。

殺人衝動に吞まれて、人込みへ駆け入っていた彼の後姿。

ポケットに入っていたはずのナイフが見つからず、探し回っていた彼の蒼白な顔。

そして、私は公衆電話で警察に彼の特徴を話し、大通りを彼が歩いていることを知らせた。

（こうするしか……なかったの）

そして、彼はようやくその人影に気付いて、何かを叫びながら走り出す。

けれど、すぐに彼は男達の手によって地面に押さえつけられる。

彼は遠くにいる私に気付き、目を見開いた。

私は微笑み、彼を一心に見つめながら思う。

（私はいつまでも、翔君を待ってる。あなたがどんなに罪深い人でも、どうしてもあなたが好きだから。だから、ずっと待ってる）

そうしてやがて、彼の姿は周囲の人影によって見えなくなってしまう。

愛は永遠に続くことを私は信じている。

相手をずつと想い続けている限り、どんな理不尽な現実にも、愛は耐え忍ぶ。

（私が、その生き証人になる）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2351r/>

裏切りの恋『改稿版』

2011年11月15日15時33分発行